

令和 5 年度 学内懸賞論文

「言葉を生かす、言語化できるという最大の武器」

～学外活動を通して、日本社会を考える（実習活動を含む）～

東北福祉大学 教育学部教育学科 中等教育専攻 3 年

21ER033 檜山太陽

1. はじめに

新型コロナウイルスが猛威を振るって4年が経った。この4年間で私たちのライフスタイルは変化し、価値観も多様になった。マスクの着用、外出や対話の制限によるコミュニティの減少、それに伴ってインターネットやAIが大いに活用され、急速に情報社会へと進んだ。各SNSやアプリ等の利用、AIを活用した「ChatGPT」やオンライン会議等、私たちは技術開発に基づきそれに囲まれて生活をしている。また、学校教育ではICT教育やAIを活用した「GIGAスクール構想」の取組を始めている。この4年間は、AIの技術開発がより進み、私たちが生きる上で切り離せない存在となった。こうしたものは、私たちが今まで時間をかけて考えていたことをまとめ予測し、その次の方向性を瞬時に示してくれる。しかし言い換えれば、人間は考えることをしなくてもよくなったと言える。AIが自分の考えを予測して代弁してくれるからである。

思想家パスカルは、「人間は考える葦である」と位置づけ、人間は弱いものだが「考える」という働きは偉大であると述べた。しかし、現代を鑑みて私が危惧しているのは、言葉と言葉を紡げず、短い会話でしか自分の考えを伝えられなくなることである。私は、歴史を辿り現代と比較すると、一つの大きな違いがあると考え。それは、自身の考えを「言語化」することである。自分の考えを言語化することは大きな武器であり、自身の経験や観た景色、触れた感触、感じた想いなどは、自分で言葉を紡ぎ伝えなければならないと思う。それをAIに任せては、言葉が持つ意味や形・イメージ・発音の美しさが消え、自分だけの体験や感情が薄れてしまう。

次項では、自分の考えを言語化することが出来なくなっていることを日本社会の問題と捉え、私が行った教育実習やボランティア活動の学外活動などから教育分野を中心に考察し、述べていく。

2. 思考を問う中での短い答えの問題点

街頭インタビューで「物価高についてどう思いますか」と聞かれたとき、あなたはどのように答えるだろうか。ここで気になるのは、「短い言葉」で自身の言葉を集約している人が多いことである。「高い」「辛い」などという一つの言葉で延べ、どうして辛いのか、どうなってほしいのか自身の考えがあまり伝わってこない印象を持つことがある。短い言葉で自身の考えを言語化することは、今の日本社会において危惧しなければならないことだと思う。

私は中学校社会科教諭を目指しており、いかに生徒の歴史の見方を変えられるか、地理では日常に着目できるか、生徒一人一人が主役になれるためにはどう授業を行うべきか日々研鑽を積んだ。教育実習では、思考力を問うテーマとして、「平城京と平安京の都の違いを考えてみよう」と題し、奈良時代と平安時代の社会変化（仏教勢力→貴族政治）に焦点を当てて授業を行った。また、「奈良時代の文化財で自分が観てみたい作品を選ぼう」と題し、

東大寺の正倉院の中にあるシルクロードを通して唐へもたらされた作品、インドや西アジア地域の影響を受けた作品、聖武天皇の身の回りの作品などの数多くを教科書・資料集から探し、選んだその理由を発表しあう授業を行った。しかし、ワークシートに書かれた作品を選んだ理由には、「寺がない」「綺麗だから」「かっこいいから」など文章ではなく短い答えで書かれていることが多かった。感想には「自分がどうして選んだのかを自分の考えを書くのが難しかった」という内容が見られた。私自身の予想する反応では、「○○の作品は、△△として使うのではないだろうか」や「□□の作品は、××をイメージしていると思う」というような¹構成的説明を書いてもらうことであった。ご指導いただいた先生方からは、近年の生徒の多くは自身の考えを表現することが苦手な生徒が多いと教えて頂いた。新型コロナウイルスによる隔離生活、コミュニティの多様化などから思考を問う授業は難しく、教育現場にその変化が随所に見られた。実際、知識中心の授業が多く各学年で行われていた。思考を問う中での短い答えの問題点は、主語と述語の間にある「どうしてそう考えたのか」という言葉が隠れてしまうことだと考える。²渡部久美子氏は、「日本語の場合、主語抜きでも会話が成り立つことが多いため、子どもたちは主体が誰であることを明確に示さない話型に違和感を持たずに育ってきている」と述べており、つまり、本来は言語化しなければならない内容が見えてこないことは、本人の本当の考えが表出できないことに繋がるのではないだろうか。

³森田亜紀氏は、「言葉を含む『表現』を、『思える』ということを中心に考えようとする試み」について、「われわれは、『思える』と『思う』を区別している。「私にそう思える」は、「私はそう思う」と同じではない。」と自身の言語化をする際における表現にその2つの違いについて述べている。そして、その2つの大きな違いは、「絵を見るときや小説を読むときには、そこに表現される世界について「そうだ」と思うことができる。そう思えるのである。(中略) 芸術体験においては、『そう思える』ということが必須の条件である。(中略) 「私はそう思う」とは、別の場所から自分自身を眺め、「私」と対象化し、「誰々はそう思う」と第三者について語るのと同じかたちに言い換えた言い方との考えられる」ことであると述べている。この違いを鑑みて振り返ると、先ほど述べた街頭インタビューや授業での発表などにおける短い答えは、多くは「間違い」にはならないのである。対して、自身の考えをより言語化していくと「間違い」が生まれ、突かれた時に自身の考えが否定されてしまうのである。それは、やがて自身の体験をもとにした感覚体験や芸術体験、科学的根拠や数学的

¹ 藤村宜之 『数学的・科学的リテラシーの心理学ーこどもの学力はどう高まるかー』(有斐閣 2012) 146-149 頁

² 梶田叡一 『PISA 型読解力ー論理的な認識に基づく言葉の力を』(金子書房 2020) 70-72 頁

³ 渡辺哲男・山名淳・勢力尚雅・柴山秀樹 『言葉とアートをつなぐ教育思想』(晃洋書房 2019) 135-140 頁

根拠があるものだとしても、言語化していくことで間違えることが「怖い」と感じてしまうことに結び付き、短い答えの選択をするのではないだろうかとは私は考える。しかしながら、自分の考えを書き出していく中で主語・述語の間に自身の感覚や感触などを正解に捉われずに表現することは、日本にある言葉を生かすうえで大切な行動である。

3. 日本社会の現状－教育における言葉との接点－

私たちは日々言葉と接しているように見えて、その機会が失われてしまっている。2023年における⁴読書に関する調査（図1）では、男女問わず各年代においておよそ半数が半年に読む本の量が1冊未満と答えている。AIを活用では、言葉の脈絡やその意味の正誤が曖昧になっていることは問題点といえる。それに対し、活字を扱う書籍には自分がまだ見聞きしたことのない新しい言葉と出会い、その言葉の意味や使い方についても学ぶことができる。AIと書籍の違いは、文章を作る筋道であり、大きく影響するのは本人の思考を基にした言語化が初めから文章に乗っかっているかどうかだと思う。



図1 『Cross Marketing』作成を引用

また、多くの小中学生の長期休暇において頭を悩ませていたであろう「読書感想文」が学校の宿題から無くなりつつあるのはご存じだろうか。今年の7月に行われ参加した「サマースクール学生ボランティア」では、中学生に学習を教えていく中で、生徒に分かる・できる楽しさを伝えることや教えることの難しさを知ることが出来た。しかし、生徒と対話するうえで気になったのは、「ChatGPT」を活用して読書感想文を書く生徒がいるということである。例えば「ごんぎつね 感想 2000字」と入力すると瞬時に内容が表示され、文脈の

⁴ 『Cross Marketing』より「読書に関する調査 2023」 最終閲覧日 12月30日
<https://www.cross-m.co.jp/report/life/20230913book/>

整理と言葉の入れ替えを行えば読書感想文を完成させることが出来る。AI の活用で留意することが難しいのは、本人が言語化がどこに含まれており記されているのかだと感じる。メディアでも取り上げられ、教育現場では早急な対応が必要になった。こうした自身の考えが空っぽである言語化があたかも自身の考えであると提示できる現状は、日本社会を総じて俯瞰したときに日本語を扱い生きていく中で非常にもったいないと感じる。

4. ボランティアを通して学んだ AI の活用メリット

しかしながら、AI の活用は日本社会において利便性も大いに示す。今年度、「大和町サマースクールの生涯学習ボランティア」に参加した。生徒一人一人には PC が配られ宿題や自習に取り組んでいた。生徒の PC では正答率が AI に記録され、再度挑戦したときに間違った問題の類似問題が出題され、苦手克服に努められる学習を行っていた。生徒自身に話を聞くと、自分の好きな時間に学習して適度に合うペースで復習や予習が行えるのは学びが深まるとのことだった。また、新型コロナウイルスが流行した際に学校と家庭での学習の確保が AI を通して管理できることは、教育現場にとっても画期的な導入と言える。だが、正誤での表記が多いために間違えた問題にはどうして間違えたのか自分で調べさせること、適宜ヒントを示すなど、本人がどうして間違えたのか気付けるよう導いてあげる必要があると感じた。

5. 合唱曲から学ぶ古語の言語化

私は、混声合唱団に所属し学外でもコンサートに出演しているが、その中でも印象深い曲がある。それは、⁵第 75 回全日本合唱コンクール課題曲（G4）「空と涙について」である。恋を想う 7 つの古今和歌集によって構成され、恋の虚しさや儂い恋を表現している。その一首（源具親）に「わが恋を人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ」というのがある。意味は、「私の恋をあなたは気づいているだろうか。いや気づいていないでしょう。この枕だけが知っているでしょう。」となる。自分の愛する人への想いに気づいてくれないその想いを表現している。

歴史を辿ったときに現代より前の時代においては、行動や対話、恋愛や政治など自身の体験を言葉を用いて常に表現していた。数百年から数千年経った今もその想いが伝わるのだから、言語化することが非常に長けていたということである。

⁵ 長谷川冴子 『2023 年度全日本合唱コンクール課題曲集 G4 「空と涙について」
作曲 田島祐一』（一般社団法人全日本合唱連盟 2023）

6. PISA2018（生徒の学習到達度調査 2018 年調査）から考える日本の読解力

PISA2018 とは、⁶OECD（経済協力開発機構）の生徒の学習到達度調査（PISA）は、義務教育修了段階の 15 歳児を対象に、2000 年から 3 年ごとに、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの 3 分野で実施（2018 年調査は読解力が中心分野）された学習到達度調査である。2018 年の調査の結果（図 2）、日本の読解力は 2015 年と比べ OECD 加盟国（37 か国）中 11 位まで下落している。調査の分析では、「情報を探し出す能力」が減少傾向、「評価し、熟考する」能力が減少し、「質と信ぴょう性を評価する」「矛盾を見つけて対処する」力の問題の正答率が低いことが分かった。

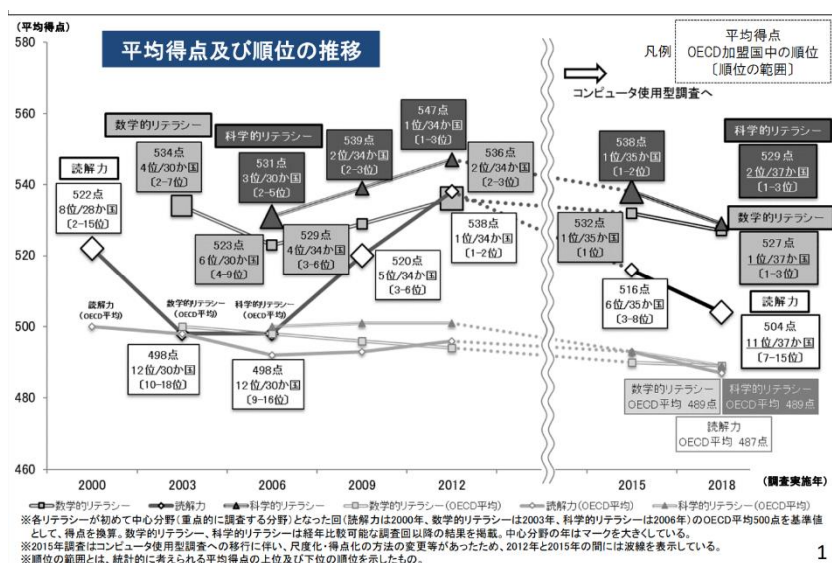


図2 国立教育政策研究所作成より引用

⁷鎌田首治郎氏は、こうした能力について「これらは、目的を持った主体的な人間が行う挑戦の積み重ねと共に育つ」と述べている。情報が自分事で切実であればあるほど熟考し、真剣に評価するとした。ここで、日本社会と照らし合わせると、私たちが数多くの情報を精査するということは、自身の言語化をするうえでかなり重要と言える。一方で、正しい情報を取捨選択できないまま言語化している可能性がある実態は、日本社会の考えなくてはいけないところだと感じる。

⁶ 国立教育政策研究所 『OECD 生徒の学習到達度調査 2018 年調査（PISA2018）のポイント 最終閲覧日 12 月 30 日

https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01_point.pdf

⁷ 梶田叡一 『PISA 型読解力ー論理的な認識に基づく言葉の力を』（金子書房 2020）25－28 頁

7. 言語化するために必要な支援

言語化することは大切であると述べてきたが、勿論苦手な人もいる。教育実習では皆の前で話すことが苦手な人、いつもグループで話す人と二人組で話す人、ワークシートの文章を推敲するのが得意でない人など、生徒の個性も相まってコミュニケーションの得意不得意は多種多様だと感じた。だからこそ私は、話し終わるまで「待つ」という視点は大切であると考えている。遮ってしまうと、本人が努力した言語化までの道のりが水の泡となってしまう。教育実習では、そうした苦手な生徒の意見を最後まで聞き尊重し、授業の展開に活かし広げた。相手の考えを受け入れるのは言語化する中で必要な要素である。また、日本社会全体が対話を通した日常を過ごす中で大切な視点だと感じる。

8. おわりに

技術開発が進む今日において日本社会が忘れてはいけないのは、自分の考え即ち言語化は自分の最大の武器であるということだ。それは、歴史を辿った今でも変わらないことだと思う。私自身、教育実習や学習支援ボランティア、混声合唱団としての学外活動等の関わりを通して「言葉」という魅力について深く知れた。言葉を紡ぐことで自分が知らない視点に気づくことが出来る。自分の想いや考えは世界で唯一のものであって、押し殺してしまうと更にいい考えは生まれない。AI に私たちの考えを委ねては、やがて私たち自身に自信が持てなくなってしまうだろう。

思想家パスカルは「人間は考える葦である」と述べているが、もしかすると AI の技術革新が進めば、人間は考えることを本当にしなくてもいい時代が来るかもしれない。だが、常に「疑問」を投げかけて主題を捉え文脈を理解すること、自分の考えをいかに言葉で表現し言語化することができるというのは日本の社会に問われる命題だと考える。

【参考・引用文献】

- ・藤村宜之 『数学的・科学的リテラシーの心理学－こどもの学力はどう高まるか－』
（有斐閣 2012）146 頁－149 頁
- ・梶田叡一 『PISA 型読解力－論理的な認識に基づく言葉の力を』（金子書房 2020）
70－72 頁
- ・渡辺哲男・山名淳・勢力尚雅・柴山秀樹 『言葉とアートをつなぐ教育思想』（晃洋書
房 2019）135 頁－140 頁
- ・『Cross Marketing』より「読書に関する調査 2023」 最終閲覧日 12 月 30 日
<https://www.cross-m.co.jp/report/life/20230913book/>
- ・長谷川冴子 『2023 年度全日本合唱コンクール課題曲集 G4 「空と涙について」作
曲 田島祐一 』（一般社団法人全日本合唱連盟 2023）より歌詞引用
- ・国立教育政策研究所 『OECD 生徒の学習到達度調査 2018 年調査（PISA2018）のポ
イント最終閲覧日 12 月 30 日 https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01_point.pdf
- ・梶田叡一 『PISA 型読解力－論理的な認識に基づく言葉の力を』（金子書房 2020）
25 頁－28 頁
- ・梶田叡一 『いま求められる言語活動－読む力・書く力を重視して』（金子書房 2013）
38 頁－45 頁